

7月6日シンポジウム「もっと知りたい認知症 Q&A：体験者の声から学ぶ」

第2部 Q&A 資料

Q1：認知症の薬物療法にどこまで期待していいのでしょうか？

母は半年ほど前からアリセプトを飲むようになって、進行が止まっているように感じるし、表情も以前に戻ったような感じがしている（「認知症の薬物療法」介護者 10 さん）

【インタビュー時：56 歳（2010 年 12 月） 関係：長男（実母を介護） 診断時：実母 83 歳、介護者 54 歳】 2007 年に実母がアルツハイマー型認知症と診断される。アリセプト内服中の母は独居。介護職を専門として勤務している長男が週末に 1 泊して遠距離介護を行っている。主として介護の実務を行っているのは県内に住む姉で、週 5 日通って介護している。ショートステイやデイサービスを利用しても、週 1 日は母親が 1 人になってしまう。将来を考え、入所を勧めたいが、姉が反対している。母親も入所を希望しており、時間をかけて姉を説得中。

薬は効いているかちょっとわからないが、多分いいんだろうなと思っている（「認知症の薬物療法」本人 03 さん）

【診断時：50 歳 インタビュー時：57 歳（2010 年 5 月） インタビュー介護者 04 の妻】

元立体絵本の作家で、夫と母の 3 人暮らし。2003 年 6 月、「若年性アルツハイマー型認知症」と診断される。現在は、大学病院の専門外来に通院中。夫が主治医に相談しながら、アリセプトの他に、個人輸入のメマンチン、八味地黄丸などを購入し、それを服用している。3 年ほど前から家事ができなくなり、見当識障害が現れたため、週 3 回の家事援助と週 1 回のガイドヘルパーを依頼している。週に 1 回はデイサービスに通う。

レビー小体型認知症に抗認知症薬は劇的に効くが、次第に副作用が出て、飲み続けられなくなることが多い。家族会では薬の分量を微調節して穏やかな日々が送れているという話を聞く（「認知症の薬物療法」介護者 34 さん）

【インタビュー時：62 歳（2012 年 9 月） 関係：長女（実父母を介護） 診断時：父 81 歳、母 80 歳で診断されたのは介護者 52～54 歳の頃】 2002 年に 2 世帯同居の実父が脳血管性認知症の診断を受け、2 年後にレビー小体型認知症と判明。同じ頃、実母もアルツハイマー型認知症の診断を受けて、しばらくひとりで 2 人の介護をしていたが、父の脳梗塞をきっかけに母は有料老人ホームに入所。2006 年秋、父は肺炎で入院中し、そのまま帰らぬ人となった。その後、母に腎臓がんが見つかったが、本人の意思もあって手術はせず、2011 年秋に自宅に引き取り、亡くなるまでの 3 カ月間、在宅で看取った。

アルツハイマー型認知症の夫は怒りモードになると対応に困る。そのときは処方されている疳（かん）の虫を治めるような漢方を飲ませると落ち着く（「認知症の薬物療法」介護者 16 さん）

【インタビュー時：72 歳（2011 年 10 月） 関係：妻（夫を介護） 診断時：夫 75 歳、介護者 68 歳】 2007 年に夫がアルツハイマー型認知症と診断され、アリセプトの内服を始める。夫と三女夫婦の 4 人暮らし。他に娘が 2 人いる。介護者は元薬剤師。夫は開業の外科医で、介護者と外科

医院を開業していたが、診断を受けて休院することになった。自宅介護を始め4年後より徘徊がみられるようになり、対応に苦慮して介護保険を申請する。要介護3と認定され、デイサービスを利用するようになる。

Q2：認知症本人や家族はどんな公的支援をうけられるのでしょうか？

舅が療養中、介護をしている友人に助言をもらっていた。両親のときにそのことが役立ってスムーズにいった。介護の情報は自分から困っていると開示することが重要だ（「サービス・施設の利用」介護者01さん）

【インタビュー時：61歳（2010年2月） 関係：長女（実父母を介護） 診断時：父82歳、母80歳が診断されたのは介護者54～56歳の頃】2002年に父親が脳血管型認知症と診断され、2年後には母親もアルツハイマー型認知症と診断された。ともにアリセプトを内服しているが、母の場合は父よりも進行が急速だった。発病当時、両親は2人だけで暮らしており、長女は隣県に住んでいたが、遠距離介護を行うためフルタイムからパートへ仕事を変えた。さらに次女・三女が仕事を変えて実父母と同居することになり、2007年からは4人で暮らしている。週3回デイサービス利用。

妻は家事ができないので、週3日ヘルパーさんに介助をお願いしている。障害者向け（自立支援医療）のガイドヘルパーさんにスポーツクラブや映画に連れて行ってもらう（「サービス・施設の利用」介護者04さん）

【インタビュー時：60歳（2010年5月） 関係：夫（妻を介護） 診断時：妻50歳（インタビュー本人03）、介護者52歳】2003年に妻が若年性アルツハイマー型認知症と診断を受ける。夫婦2人暮らし。妻の介護のため、グラフィックデザイナーの夫は、職場を自宅へ移すことにした。現在は家事援助で訪問介護のヘルパー週3回、自立支援で週1回外出支援を活用して、自宅で仕事をしながら介護している。治験に参加し、八味地黄丸や個人輸入のメマンチンなど良いと言われることはいろいろと試している。

高齢者の多い施設だと動けない人が多く、大昔の歌を歌ったりして、夫は「居場所がない」と言っていた。今のところは若年性専門のデイサービスでとても気に入っている（「サービス・施設の利用」介護者33さん）

【インタビュー時：55歳（2012年9月） 関係：妻（夫を介護） 診断時：夫61歳、介護者53歳】膠原病を15年患った夫は、60歳前に夜中の異常行動や幻視が顕著となり、得意だった計算や縦列駐車もできなくなった。パーキンソン症状も出て、2010年4月レビー小体型認知症と診断される。夫婦2人暮らしで子どもはいない。2011年に要介護3、2012年に要介護4と認定。若年性認知症対応コースのあるデイホームに週1回とショートステイを活用し、自宅介護を続ける。

Q3：介護うつ、虐待に陥らないためにはどうしたらいいのでしょうか？

自分も心では優しく接したいと思うが、つい赤ちゃんのしつけみたいにあれしてこれして、と言った

り、腹を立てたりしてしまう自分は冷たい人間なんじゃないかと思う（「介護者の心の葛藤～介護うつ、虐待に陥らないために」介護者 17 さん）

【インタビュー時：65 歳（2011 年 10 月） 関係：長女（実母を介護） 診断時：実母 76 歳、介護者 51 歳】 2008 年に実母がアルツハイマー型認知症と診断される。当初、母親は実家で次女と 2 人暮らしで、日中デイサービスを利用していましたが、病状が進行して日中一人にしておけない状況になる。2011 年より介護者である長女宅へ呼び寄せて、母・夫・息子の 4 人暮らしが始まる。介護者は自営業。週 3 回デイサービス利用。

つい常に前向きにチャレンジするという自分の価値観を母にも押し付けてしまう。自分を変えることが自分の認知症との闘いだと思う（「介護者の心の葛藤～介護うつ、虐待に陥らないために」介護者 09 さん）

【インタビュー時：48 歳（2010 年 10 月） 関係：次女（実母を介護） 診断時：実母 80 歳、介護者 46 歳】 2008 年に実母がアルツハイマー型認知症と診断され、2 人暮らしで自宅介護をしている。母は週 4 回デイサービスを利用している。介護者は企業の健康管理センターに勤務。診断を受けた当初、症状を悪化させたくない気持ちから、母に脳トレや機能低下防止の体操等を強いてしまったが、母の気持ちになって考えられるように変わろうとしているところである。嫁いだ姉がいる。

認知症の父は元気で当分お迎えは来ないと思いつめ、ガス栓をひねった。犬が吠えたので我に返って慌てて止め、母と共に一晩わあわあ泣いて新たな覚悟ができた（「介護者の心の葛藤～介護うつ、虐待に陥らないために」介護者 30 さん）

【インタビュー時：34 歳（2012 年 7 月） 関係：長女（実父を介護） 診断時：実父 64 歳、介護者 27 歳】 1997 年父が 56 歳で脳梗塞となり、退職。一人娘の介護者は両親と 3 人暮らしで、19 歳から生活と介護を支えてきた。しかし、2005 年に父がアルツハイマー型認知症と診断され、状態が悪化。母も体調を崩し、介護者は介護離職した。経済的にも追い詰められてうつ状態となり、一時は死を考えた。今は週 1 回のデイサービス、1～2 カ月に 1 回のショートステイを利用しながら在宅介護中。

Q4：認知症の進行と家族の役割とは？

漢字の書き取り、計算ドリル、パズルなどをやったが、全く効果がなく苦痛だけで終わった。できなくなっていくことは本人も自覚しているのですごくつらいだろう（「認知症の非薬物療法・リハビリ・代替療法」介護者 04 さん）

【インタビュー時：60 歳（2010 年 5 月） 関係：夫（妻を介護） 診断時：妻 50 歳（インタビュー本人 03）、介護者 52 歳】 2003 年に妻が若年性アルツハイマー型認知症と診断を受ける。夫婦 2 人暮らし。妻の介護のため、グラフィックデザイナーの夫は、職場を自宅へ移すことにした。現在は家事援助で訪問介護のヘルパー週 3 回、自立支援で週 1 回外出支援を活用して、自宅で仕事をしながら介護している。治験に参加し、八味地黄丸や個人輸入のメマンチンなど良いと言われることはいろいろと試している。

嚥下ができなくなり胃ろうを造るか聞かれたが、したくないと言っていた夫の言葉を尊重し、食べることが好きな夫の気持ちを考え、子どもたちや夫の兄弟とよく話し合った（「病気の進行と意思決定」介護者 12 さん）

【インタビュー時：62 歳（2011 年 8 月） 関係：妻（夫を介護） 診断時：夫 55 歳（67 歳で逝去）、介護者 49 歳】1998 年に夫が若年性アルツハイマー型認知症と診断される。介護者は当時、夫と娘 2 人の 4 人暮らし。診断時、家族一丸となって頑張ろうと話した。夫は製薬会社に勤務していたが休職。1999 年アリセプトの内服を始めるが、1 年後頃より乱暴になり、主治医の判断で中止となる。2004 年に介護者が体調を崩した為、夫を介護施設に入居させ、毎日見舞いに通う。次第に夫が痙攣を起すようになり、誤嚥性肺炎で入退院を繰り返し、2010 年逝去した。

失神して救急搬送された際に胃ろうにするかどうかの選択を迫られた。主治医の助言で父の意思を確認したら、まだ頑張りたいから胃ろうをつけると言った（「病気の進行と意思決定」介護者 34 さん）

【インタビュー時：62 歳（2012 年 9 月） 関係：長女（実父母を介護） 診断時：父 81 歳、母 80 歳で診断されたのは介護者 52～54 歳の頃】2002 年に 2 世帯同居の実父が脳血管性認知症の診断を受け、2 年後にレビー小体型認知症と判明。同じ頃、実母もアルツハイマー型認知症の診断を受けて、しばらくひとりで 2 人の介護をしていたが、父の脳梗塞をきっかけに母は有料老人ホームに入所。2006 年秋、父は肺炎で入院中し、そのまま帰らぬ人となった。その後、母に腎臓がんが見つかったが、本人の意思もあって手術はせず、2011 年秋に自宅に引き取り、亡くなるまでの 3 カ月間、在宅で看取った。

Q5：認知症とともに生きるとはどういうことなのでしょう？

診断がつかない頃は「どうして自分がアルツハイマーになったのか」そればかりだった。わたしの生き方が悪かったからではない、「わたしはわたしだ」とようやくわかった（「認知症と向き合う本人の思い」本人 05 さん）

【診断時：59 歳 インタビュー時：63 歳（2010 年 9 月） インタビュー介護者 08 の夫 元脳神経外科医。妻と 2 人暮らし。】2001 年頃易しい漢字が書けなくなり下痢も始まり、体の衰弱が激しくなった。2006 年に若年性アルツハイマー型認知症と診断を受ける。2007 年クリスティーン・ブライデンさんの講演を機にアルツハイマー型認知症であることを公表。ようやく自分の病気と自分自身を受け入れることができた。アリセプトと個人輸入のメマンチンとで病状は安定している。夫婦ともにクリスチャン。

認知症で困っている人がいれば、なんとかしなくてはいけないと思う。もう無理なこともあるので、それを考えると怖くもなるが（「認知症と向き合う本人の思い」本人 07 さん）

【診断時：54 歳 インタビュー時：57 歳（2011 年） インタビュー介護者 15 の夫】
大学で教職にあったが、2009 年に若年性認知症と診断され、現在休職中。週の 1 日はサポートセンターを通じて受けた仕事をし、1 日はサポートセンターで英語を教えている。母親を含

め認知症の高齢者が気になっており、自分のできることをしてあげたいと考えている。最近はやることが複雑に感じられ、考え方をもう少し変える必要性を感じている。2012年春に退職予定だが、現在働いている妻と二人暮らしで、落ち着いた日々を送っている。

元気な頃は「おい」「飯」というだけだったが今は必ず笑顔で「ありがとう」という。今は「ごめんなさい」を言う練習もして、妻とぶつかっても自分が叱られて終わるようにしている（「認知症本人の家族への思い」本人 04 さん）

【診断時：57歳 インタビュー時：61歳（2010年7月） インタビュー介護者 05 の夫】
妻と2人暮らし。2004年頃、新しい職場に配属されストレスから不眠になり、メンタルクリニックを受診、うつ病と診断される。休暇後職場復帰するが、仕事に支障が出て大学病院を受診。2006年に若年性アルツハイマー型認知症と診断される。診断6カ月後、36年勤めた市役所を退職。診断3年半後、有料老人ホームで介護の手伝いをするようになる。利用者の喜ぶ顔が励み。これからも何らかの形で人の役に立ちたいと思っている。